Ⅳ　昭和四十年代

相次ぐ公害問題の発生

―長期高度経済成長から低経済成長へ―

昭和四十年の不況は短期間に終わり、同年十月から、四十五年七月の五十七ヵ月にわたる長期間「いざなぎ景気」といわれた大型景気が続き、「昭和元禄」とまでうたわれた。この間、資本自由化の実施で経済の効率化が推進され、ＧＮＰ世界第二位の経済大国となった。その結果、「高度経済成長」が本格化し、国民生活にも真の「３Ｃ時代」が到来し、耐久消費財の大型化や高額化が進み、「高度大衆消費社会」時代となった。カラーテレビが白黒テレビを追い抜き、乗用車は三〇〇万台になり、モータリゼイション時代が到来した。

消費革命や流通革命によって、庶民の間に中流意識が増大したのもこの時期であった。

その結果、「消費は美徳」などと言われ、これをリードしたのが戦後生まれの団塊世代であった。

しかし、昭和四十年代も後半になると、日本経済も息切れしてしまい、日本万博を境に長期成長も終焉を迎えることになった。

ドルショックと共に為替相場固定制が崩壊し、日本列島改造論は曲り角を迎えた。そして第一次石油ショックに続いて狂乱物価と不況により戦後初のマイナス成長となった。昭和四十年代後半は「ドルショックと石油ショックの二重苦」の時代で、高度経済成長から、一挙に低経済成長時代に移行した。かくしてこの年代は高度経済成長の転換期となった。

昭和40年（短期間に終わった不況）

☆犬山市に「明治村」が発足

朝永振一郎ノーベル物理学賞を受賞

☆東京でスモッグ警報・注意報

昭和四十年代の教育

昭和四十四（一九六九）年、中学校の学習指導要領はまた改訂されたが、それは基本的には三十三年度の線に沿うものであり、学習内容の精選に加えて、創造性の開発、思考力の形成、社会連帯精神の育成などが強調されている。三十三年を転機に、生活経験主義から学問体系重視の方向へ学校教育は大きく変わった。しかし、科学技術の進歩がもたらしたマイナス面が大きくクローズアップされ、教育においても「人間」や「自然」が科学技術との調和において追求される時期を迎えている。国際的には新安保条約を背景に、わが国の教育界は多くの問題をかかえていた。政治・社会の面でも急速に保守化が進み、経済政策のすべてにわたる優先が目立ちはじめた。三十五年には経済審議会が「国民所得倍増計画にみあう中等教育の完成」、三十八年には経済審議会が「経済発展における人的能力開発の課題と対策」を答申した。これらはいずれも教育制度のあり方に関する経済界の意見、要望を反映したもので、国際的な経済競争と科学技術競争の中で、90％を超えた高校進学率の上昇による若手労働者の不足や科学技術の進展に即した人材の確保のために学歴偏重を否定する新能力主義を強調し、早期に職種別分化を可能にする学校体系の確立を主張するものであった。

政府・文部省はこれらの声に応えて、三十七年、五年制高等専門学校を発足させ、学校制度の再改革に本格的に取り組み始めた。四十一年の中教審は「後期中等教育のあり方、キャッチフレーズ〝期待される人間像〟」を報告、同年の理科教育及び産業教育審議会への「職業高校の多様化」と「普通教育の多様化」、そして第三の教育改革といわれる四十六年の中教審答申「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策」など、一連の学制改革案が提出されることになった。これに先立つ四十一年から四十五年における二中は、生徒指導研究校として教育改革の実験校の役割を担ったものと考えられる。

昭和41年（いざなぎ景気の幕開け）

航空機事故多発

◎2月：全日空機羽田沖に墜落

◎3月：カナダ航空機羽田空港防波堤に衝突

◎3月：英国航空機富士山頂で空中分解

◎11月：全日空機松山沖に墜落

全校合奏（笛）

生徒指導研究校

昭和四十年代初期、二中では二度にわたり生徒指導研究校の指定を受けた。

四十一年度～四十三年度の三年間は市川市教育委員会からの指定であり、次いで四十四年度～四十五年度の二年間は文部省の生徒指導推進校の委嘱を受けた。

生徒指導の研究とは、生徒一人ひとりの生活や学習面において、どんな個性を持っているか、これをどう伸ばしていくか、また、不適応な点をどう指導することにより立派な公民として適応させていくかの研究である。

二中のテーマは前者は「心情豊かな、協調性に富む生徒を育てる」であり、後者は前者の反省も踏まえて「望ましい生活、学習習慣の形成をめざす」と設定された。

その実践研究の成果をもとに、昭和四十三年十一月には市川市の公開研究会が、四十四年十一月には文部省指定生徒指導研究発表会が、四十六年二月には研究報告会（文部省）が開かれた。

こうした大きな目標と視聴覚教育の取り組みもあって、生徒も先生も活気に満ち、市川市のモデル校として盛り上がりをみせた。

生徒指導公開研究会（市川市）

昭和四十三年十一月二十一日、二中が三年前から市川市教育委員会からの指定を受けて研究を進めてきた「生徒指導」の公開研究会が市内をはじめ県内、遠く沖縄からの特別参加を含め百五十名という先生方を迎えて行われた。現在忘れがちな「心情を豊かにし、協調性を高める生徒指導」というテーマの実践研究は、内外から注目を浴び、その成果が期待されていた。午前中は全学級の公開授業と二中独特の笛とギターによる全校生徒の合奏と合唱が行われ、これまでの日頃の生徒たちの練習が見事に結実し、すばらしいハーモニーを見せ、参会の先生方に大きな感動を与え、研究の成果に花を添え

全校合奏（ギター）

☆4月：公労協・交通共闘統一スト（戦後最大の交通スト）

☆公共料金値上げラッシュ

☆コインランドリー登場

た。また特に公開授業の中で、クラブ活動や生徒会活動の展開はあまり他では例のないものとして高く評価された。昼食時にはブラスバンドクラブと放送クラブの発表が講堂で行われた。午後は「学校教育相談を通して生徒一人ひとりの適応をはかる」、「学級集団の指導を通して生徒の集団意識を育てる」、「生徒会活動・クラブ活動を通して集団への所属感を高める」という三つの分科会で二中のこれまでの実践が研究発表され討議された。全体会では、県指導主事の先生方からの講評があり、「二中がこれまでの成果を踏まえ、さらに継続的に研究を進め、進学準備などで知育に偏った現在の中学教育を打破するきっかけとなるだろう」と結ばれた。二中を名実ともに市川のモデル中学校として盛り上げる出発点として各先生方にとっては意義ある一日でもあった。

（「PTA会報」33号　昭和43年12月）

生徒指導公開研究会（文部省）

昭和四十四年度研究会は十一月十九日、約三百名の参観者を迎えて行われた。

発表会では、前年までの「心情を豊かにし、協調性を高める生徒指導」を重点とした研究課題を進めていく過程で、生徒の中には性格は温厚、明朗ではあるが、個人生活、集団生活の面に節度ある正しい生活習慣、学習習慣に欠け、自主性、積極性にも乏しいといった反省がなされていた。そこで今年度は文部省の生徒指導研究推進校に選ばれたのを機会に「望ましい生活・学習習慣の形成をめざす生徒指導」というテーマを掲げ、これを実践するために三つの研究部門を設けて研究を進めたことが報告された。また、授業参観、全校合奏と日頃の研鑽の成果を発揮した。

生徒の当日の発表態度について、宇津木校長は「（略）本番にかかると実に立派にやってのける。（略）あの発表日の行動が、日常生活に半分いやその三分の一ずつでも積み重ねられていくならば、本当に本校が名実共に立派な二中になるであろうと思います」と感想を述べている。

（「PTA会報」36号　昭和44年12月）

昭和42年（資本自由化の実施で経済効率化の推進）

経済の動き

30年代後半の輸入自由化に次ぎ、資本の自由化が実施され、大企業間の合併が相次いだ。生産設備の近代化・巨大化が進展し、中小企業にも労働力不足の対応から設備の近代化進展。

公害関係

◎富山県の「イタイイタイ病」は、鉱業廃水が原因

◎阿賀野川水銀中毒は工場の廃水が原因

◎四日市ぜんそく、石油コンビナート6社に慰謝料請求訴訟（初の大気汚染公害訴訟）

☆自動車保有台数1千万台を突破、マイカーブーム到来

☆「ローン」「クレジット」の新造語登場

生徒指導研究報告会（文部省）

二中の研究テーマは、学級集団を基礎として「望ましい生活、学習習慣の形成をめざす生活指導」である。この主題を達成するために教育相談・学級指導・教育指導・生徒活動の四研究部を設け、それぞれがより具体的な研究課題を設定し、研究を実践してきた。四十六年二月三日の研究報告会では、二中の概要、研究経過と成果、問題点等の提案がなされ、参会の先生方から質問や参考事例の発言で二時間の討議時間が短く感じられたくらい活発に討議され、大変得るところがあった。来校の先生方は県内の生徒指導の専門家で、参加数こそ百三十名くらいであったが、討議内容は質的に極めて高いものであった。二中の先生方自身にとっては生徒指導なるものがどんなことかは研究を通して勉強になった。しかし、残念なことには、生徒一人ひとりの生活や学習面で研究の成果が現れ、保護者の皆様に喜んで頂けるまでには発展しなかった。

（「PTA会報」41号　昭和46年3月）

視聴覚教育

昭和四十年代はまた、技術革新の進歩が教育の分野にも大きな影響を与えた時代である。二中でも、四十年頃から教育の近代化を学校目標に掲げ、視聴覚教育の実践研究に本格的に取り組んだ。従来の黒板とチョークによる教育方法だけでなく、ラジオ、テレビ、ビデオレコーダ、スライド、OHP、アナライザーなど最新の機器を活用する視聴覚教育を推進して行こうというものであった。NHK放送教育研究校の指定を受けたり、先駆的に取り組んだりしたため、千葉県視聴覚教育研究会での報告など県下でも大きな評価を得た。

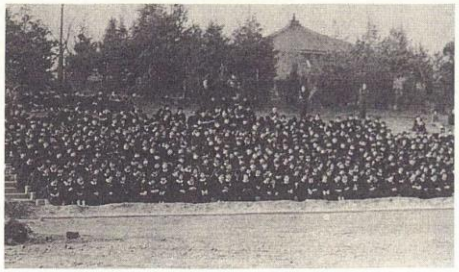
テレビ教育

四十一、四十二年とNHKから放送教育研究の委嘱を受け、特にテレビ、ラジオの活用による学校教育を中心とした研究を進め、その成果を四十二年に発表した。四十三年にはこれまでの研究成果を顧みて、テレビ教育のさらなる活用と定着化をはかるためにテレビ

昭和43年（GNP世界第2位の経済大国に）

経済の動き
明治100年目にあたるこの年の国民総生産は、自由経済世界において、アメリカに次ぐ第2位に達し、経済大国の地位の確立。

☆消費者保護基本法公布
☆小笠原諸島返還
川端康成ノーベル文学賞受賞
☆明治百年記念式典開催
☆東京府中で3億円事件発生



校内合唱コンクール（昭和42年）

を増設し、十三教室に子テレビを置いて、〝いつでも、何処でも〟利用できるような計画をたてた。

（「PTA会報」32号　昭和43年7月）

OHP導入

四十三年十一月には、生徒指導公開研究会を機に、視聴覚器材としてOHP（オーバーヘッドプロジェクター）を導入した。従来、黒板とチョークが主に使われていた学校教育に、新しい分野を開くものとして注目された。スクリーンに映し出された教材を先生が生徒と対面して理解度を確かめながら授業を進められるので、数学の図形指導や社会科の地理指導に利用され、効果をあげた。視聴覚教育を積極的に進めた宮本先生は「ラジオからテレビの利用と進んできた本校が教育の現代化をめざし、生徒たちにしっかりした実力をつけるため、教材、教具を駆使して行こうという意欲は多いにある。今後、多方面に活用し、効果を上げてゆきたい」とその抱負を語っている。

（「PTA会報」33号　昭和43年12月）

千葉県視聴覚教育研究大会
同研究会は四十四年十一月二十一日に、二中がこれまで積み上げてきた研究の一端を示す場として広く県下の研究実践家を集めて行われた。

午前中は二中の八名の先生方の実演授業が行われ、テレビ、ビデオレコーダー、映画、OHP、テープレコーダーと各種教育機器を利用した授業は参会者の注目を集めた。午後は県下各地区の実践家による分科会、最後に、東京教育大学教授大内茂男先生の「教育機器の導入による学習指導法の改善」についての記念講演が行われた。（「PTA会報」36号　昭和44年12月）

アナライザーの導入
視聴覚教育の分野で県下でも評価されていた二中では、さらに先進校を目指して新しい試みを推進した。その一環としてアナライザー（集団学習反応分析装置）が県下で八番目に視聴覚室に導入された。これは教卓に全生徒の答えが反応する親機が置かれ、生徒の各机にはダイヤルを回すだけで先生の質問に答えられる子機が置かれるものである。先生と生徒の装置による対話ができる訳である。当面は理科と数学の授業に利用し、さらに利用範囲を拡げてゆく。

（「PTA会報」38号　昭和45年7月、39号　昭和45年7月）

昭和44年（豊かさを実感できない高度成長のアンバランス）

経済の動き
経済大国日本は、貿易収支の黒字が定着、耐久消費財が急速に普及する大衆消費時代。しかし、1人当たりの所得は世界第20位と低く、物価は上昇。

☆東京に気象観測史上の大雪で、動いたのは都電だけ
☆東名高速道路全線開通
☆米のアポロ11号、初の有人月面着陸に成功

合唱コンクール（平成7年）

みの親）が来られた三十八年から先生の指導で始まり、現在も毎年行われる主要な行事である。その目的は、クラスが一丸となって取り組むことによって生まれてくるクラスの和（輪）づくりである。また先生は、後年活躍を見せる市川二中吹奏楽団の育成にも力を尽くされた。

生徒会文化委員会が中心に準備を進めるが、取り組みの主体はあくまでも各クラスである。各クラスで自由曲を選び、練習もそれぞれ自由。所定の練習時間以外にも、早朝から、放課後、はては掃除の時間まで練習するクラスも出てくる。最後の一週間はとくにエキサイトする。

コンクールは学年ごとに半日ずつ行われ、審査は各クラス一人ずつの代表と先生方があたる。そして各学年ごとに優勝と順位が決まる。近年は優秀な二つのクラスは市川文化会館に出場できる。

音楽担当の田島淑子先生は次の様に記している。

「二中の合唱はどのクラスも本当に素晴らしい。（略）コンクールの名の下、順位がつくがゆえに燃えるという要素も大きいが、勝ち負けには執着して欲しくないと切望する。

本番の合唱は、どのクラスもそれぞれ精一杯の力が発揮され、聴き手に大きな感動を与える。みんなの心を一つにして歌声を響かせることはかけがえのない体験である。〝二中生の心のハーモニーよ、永遠なれ！〟」

（「PTA会報」111号　平成7年12月）

全校合奏　情操教育の一環として昭和四十二年からギターと笛による全校合奏で、音楽教育、特にハーモニーの美しさを学ばせている。すでに二中の名物となったと、当時の宇津木校長は語っている。

（「PTA会報」32号　昭和43年7月）

BGM装置の活用　情操教育に一役かうようにと、休憩時間のチャイムが全校に鳴り響くと、変わって全校隅々まで心地よいメロディーがスピーカーから流れ出る。これは四十三年九月から取り入れたBGM装置によるもので、生徒たちの情操面を健やかに育てようと、音楽科と視聴覚教育研究部が協力して導入した装置である。全て自動的にチャイムが鳴るとテープから音楽が流れ、終わると次の時

合唱コンクール
二中の名物となっているクラス対抗の合唱コンクールは、音楽の村上正治先生（市川交響楽団の生

園　芸

昭和45年（日本万博と長期成長の終焉）

万博の開催
昭和45年は、3月15日から9月13日まで6ヵ月間、大阪府吹田市の千里丘陵で、日本万国博覧会開催。

☆日航機よど号を赤軍派学生グループハイジャック

☆光化学スモッグが東京で発生

間の始まりを告げるチャイムが鳴るという仕掛けで、市内では初めての試みである。生徒たちの評判もなかなか良く、担当の村上先生も「選曲にはいろいろ苦労しますが、長い目で効果を確かめたい」と語っている。

（「PTA会報」33号　昭和43年12月）

草花の育成　花や木を育てて自然に対する尊敬と愛情を育てたい。草木を植えてから芽を出し、花が咲くまでには根気よく時期を待つことが必要である。その心は今のように競争の激しい時代には、特に大切なことではないか。

（「PTA会報」35号　昭和44年7月）

林間学校

二中では、昭和四十一年度から二年生全員を対象に、夏休みを利用した林間学校が行われていた。期間は二泊三日、四十三年度までは八月に、四十四年度からは少し早まって七月に行われた。行き先は箱根、志賀高原、高峰高原などであった。

これは、校長先生をはじめ二年生の先生方が引率し、とかく教室では得られない教師と生徒、生徒相互間の心の通い合いや、大自然の中での開放されたうるおい、集団生活の訓練、体力づくりなどをねらいとするものであった。

四十一年度から五十二年度まで毎年行われた。

具体的な例を見てみると、次のようである。

・四十一年八月「箱根」宿泊　大涌谷：冠峰楼

一日目　第三京浜国道、大涌谷

二日目　Aコース：神山、駒ヶ岳登山、Bコース：不明

キャンプファイアー

三日目　不明

林間学校「志賀高原」（46年）

林間学校「志賀高原」（46年）

・四十五年七月「志賀高原」宿泊　熊の湯：ホテル一望閣

一日目　熊谷、碓氷峠、小諸、上田、志賀高原

二日目　信州の山登り、キャンプファイアー

三日目　白根、鬼押し出し、軽井沢

・五十一年　「高峰高原」宿泊　高峰ロッジ

一日目　小諸懐古園、高峰高原

二日目　登山（雨で中止）

三日目　鬼押し出し

四十六年夏の志賀高原での「林間学校の思い出」を小池礼子さんは次の様に記している。

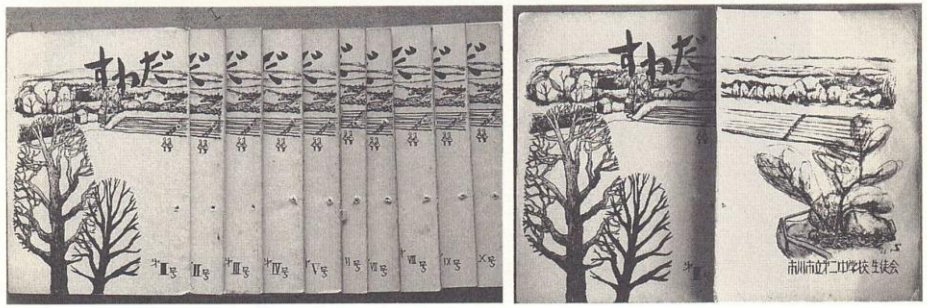
「私の林間学校は、山にあけ、山にくれてしまいましたけれど、この林間学校の中に友達同志の助け合い、先生への親しみを感じ、団体行動をするうえでの心がけの重要さを身につけました。（略）これらのよい経験を、山の澄んだ空気とともに、林間学校の思い出として、大切にしまっておこうと思う。」

（『すわだ』七号　昭和47年3月）

生徒会誌『すわだ』

生徒会誌『すわだ』創刊号は昭和四十一年四月十日に発刊された。生徒会・文化委員会が中心になって編集し、内容は生徒会、自治委員会、クラブ活動などの過去一年間の報告や感想、思い出のわがクラス、文芸作品などである。形式はA5判、六十ページほどの冊子で、表紙は墨絵風の「二中・須和田が丘の風景」、美術の菅原尚先生の筆による。

さて、ここで伝統ある『すわだ』の内容についてもう少し深く眺めてみよう。



創刊号（昭和41年4月）創刊に際し、当時の福原健夫校長は「V・S（ボランティア・サービス）精神と生徒会活動」と題する巻頭辞の中で中学生の自主性を強調され、今回の生徒会誌の発刊に際しても、自分たちの手によってなされた古新聞回収益金を充当するそうであるが、意義ある企画である。更にユニセフ募金運動（全国表彰）、チルドレンパラダイスや養老院の慰問、ベルマーク運動など、いずれも生徒自らが発案、企画し実践したもので立派なボランティア・サービスである。と評価している。

生徒会の欄では、生徒会への積極的参加、協力を呼びかけ、各自治委員会の具体的な活動報告がある。例えば「文化委員会」は校内合唱コンクールと文化祭を主催し、朝自習の徹底を呼びかけ、『すわだ』を発行。「新聞委員会」は学校新聞11、12、13号は先生まかせであったと反省し、文化祭での学級新聞コンクールは成功した…とある。

クラブ活動では、陸上競技、体操、剣道などの体育クラブが市内大会でいずれも準優勝の喜びを語り、音楽クラブ、美術・陶芸、書道、華道、電気などのクラブが創造の喜び、心の安らぎ、文化祭での活動を語っている。

創刊号の「あとがき」には、生徒会誌創刊の感激と期待を次のように記している。「みなさん待望の生徒会誌『すわだ』創刊号をここにお送りする事が出来ました。〝私たちの機関誌を〟〝生徒会活動の歩みのあとを記録するものがあったら〟という声は大分前からあったのですが、経済的なことや人材の不足から、ついつい一年のばしに今日に至ってしまいました。本年度は、どんなものでもよい、まず形を作り出そうということになり、とにかく文化委員会を中心に二学期から取り組みはじめました。今後、この文集がさらに充実して、真に私たちの文集となるよう願ってやみません。」

第二号（昭和42年4月）生徒会の役員は「生徒会だより」を日曜日返上で印刷したり、新聞紙回収

市内で無敵の運動部（昭和42年頃）

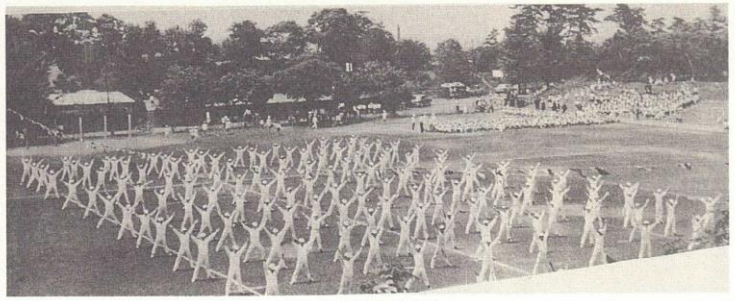
や各種募金の呼びかけを朝早く登校して行っている。老人ホームの訪問もあり、勉強になったが、毎月八十円の生徒会費を納めながら、会員のほとんどが活動に関心を払わないのが一番つらい、と書かれている。各自治委員会の報告では四十一年秋から放送設備が新しくなり、同時にNHKから研究実験校として委嘱されたことをきっかけに、活動範囲が拡がったこと、図書館の積極的な利用、また、ベルマーク委員会が発足して二年でオルガン二台が届いたこと、給食委員会の発足などを述べている。

クラブ活動では、市内大会で庭球クラブが団体、個人ともに優勝、卓球、バスケットボール、バレーボールの各クラブの男子が優勝したことを告げ、協調性、快活さも大切であるが、それ以上に「人を信ずる」ことがより重要であると強調している。文化部の各クラブは多くのクラブが文化祭の活動がもっとも強く印象に残っていると記している。

三年生の「思い出のわがクラス」には、一学期毎月アチーブ、進研テストがあっても、三学期までのんびり、よくいえば底抜けに明るい笑いが絶えない、と綴られている。

第三号（昭和43年3月）宇津木勇校長（昭和42年～49年在職）が、「語り合うことは多いが、ペンを取ることは少ないもの」として本誌の一年間の歩みを記す重要性を強調し、その歩みを列挙している。そして勉強でも運動でも時に不調に襲われることがあるが、これを克服するには焦らないことが大切であると書いている。

生徒会の項では、ユニセフ募金活動で全国表彰されたこと、老人ホーム、養育施設を訪問して喜ばれたことを述べている。各自治委員会では、集会放送委員会が設備の拡充により活動の成果が向上したこと、図書委員会はその活動により図書の利用が増大したこと、保健体育委員会は「すもう大会」と「陸上競技大会」を初めて行い、朝、昼の校庭の散水、石鹸水、水質検査、体重測定の仕事もある、などを報告している。



体育祭（昭和43年）

クラブ活動の中で、体育クラブでは、陸上競技大会総合優勝、市内駅伝競走優勝、市の元旦マラソンはメダル独占、市民大会で女子バスケットが優勝、男子サッカー、体操男女共に準優勝の成績をおさめた。文化クラブでは、園芸クラブが卒業生におくるパンジー苗を育てたり、家庭科、華道、陶芸などの各クラブの活躍が報じられている。中学校弁論大会一位作品も載っている。

第四号（昭和44年3月）巻頭に、第二十回卒業生の門出も近い。文化関係、体育関係、昨年に引き続き二中の名声をあげた誇り高い年だと記されている。

生徒会本部役員十一名。毎年生徒会活動のスローガンに力を入れている。「自分で考え実行してこそ私達の生活の中に進歩が生まれる」、「反対の立場で考える重要性の認識」など。各自治委員会の反省、協力依頼、抱負などが記されている中で、集会放送委員会は「わすれられない年度」として、校内放送にBGMも入り、アナウンスの研究、TV自作番組の作成と目標を立て活発に活動していること、江戸川女子学園主催の放送コンテストで優勝したことを伝えている。文化委員会は十万円を超す予算をもらったとある。

クラブ活動では、体育の各クラブの中で、陸上競技が市内駅伝大会に三年連続優勝、体操は市内大会で男女共初優勝、バレーボールは男子が夏、秋の大会に優勝、バスケットボールは女子優勝、秋の大会で男女とも準優勝と輝かしい成績を残した。文化関係では、市内中学校弁論大会で優勝、市内交通安全ポスターコンクール中学の部優勝、日大高校芸術祭参加中学の部学校長賞などに輝いた。

第五号（昭和45年3月）生徒指導研究校として、秋の行事がたてこむため、運動会が春に催され、文化祭は須和田祭と名付けられた。

生徒会欄に「無関心派をなくそう」と題して、ある新聞に「いまや、中学校の生徒会でも、大多数

昭和46年（ドルショックと固定変動制の崩壊）

経済の動き
8月15日米ニクソン大統領、突然金とドル交換の一時停止を発表、日本やドイツ等の貿易黒字国に対し為替レートの切り上げと10％の輸入課徴金を賦課するドル防衛策を発表。ドル・ショックの影響で、東京の株式市場は史上最大の暴落を記録した。
23日に欧州各国が変動相場制に移行
28日にわが国も変動相場制に移行

わかしお国体　聖火リレー

が無関心派でひと握りの少数派が、ガンガンがなり立ててひっかき回す、というパターンが多くなってきた…」とあった。まさしく、その通りではないか……各クラスの学級委員長は自覚を持って無関心派をなくしてほしい、と。ベルマーク委員会は時計が各クラスに入ったとある。

クラブ活動のうち文化関係では、英語スピーチコンテスト市内優勝、市内学校園写真展で二年連続優勝、その他書道、ポスターコンクールなどで特選、金賞、知事賞受賞等の成績をおさめた。体育関係では、市内駅伝、バレーボール男子ともに四年連続優勝、女子体操二年連続総合優勝、県柔道大会で団体優勝、初段四名合格、剣道市内大会で準優勝などの輝かしい成績をおさめた。

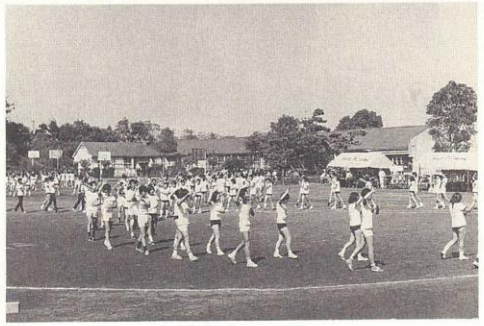
第六号（昭和46年3月）生徒会の十月五日の立会演説会はテレビ放送によって行われたとある。当日は雨で急にテレビカメラの前に立つことになった候補者はかえって緊張したという。整美委員会は清掃時に体操服に着替える事が決まったこと、及びトランシーバーの採用で各クラスの整美委員が校庭や校舎内を廻って放送室に行かないでもスムーズにアナウンスができるようになったと伝えている。

第六号からは、一部先生方の手記が載せられている。教師一年生となった吉田由美先生は無我夢中で一年が過ぎると、悲しいこともあったが、経験したことのない楽しさを味わい、特に教室で生徒たちと昼食を共にすることが一番楽しかったと述懐している。

また、大和久豊先生は「教師をしていると、四月一日は元旦のような気がする。三月は高校受験だ学期末だと盆と暮れが一緒に来たような忙しさだ。毎年のことながら、高校受験が寒い日、悪条件のもとで実施されるのは全く不合理な話である。受験生にとって一月は天王山である。そんな大切な時期に世間では正月騒ぎをしている。二月、三月の受験期はよく雪も降る。学年度の改正を望むものである。合格した者には、自分の前途を祝しているかのように眺められる桜の花も、不運にして希望校

成田空港、沖縄返還問題
◎2月、成田空港建設第一次強制代執行で機動隊出動、執行阻止の一四一人逮捕
◎9月、成田空港建設第二次強制代執行で警官二人死亡。逮捕者三七五人
◎11月：沖縄返還協定反対デモ各地で荒れる。東京では日比谷松本楼がデモ隊の放火で全焼

☆岩手県雫石上空で自衛隊機と全日空機が衝突



体育祭（48年）

に進めなかった生徒には、桜の花もさぞわびしく見えるであろう。永い人生にとって一度や二度の失敗でくよくよしてはならない。その失敗が人生にプラスになることもある。そうは言うものの寒い時期の失敗は全く身にこたえるものだ」と記している。

第七号（昭和47年3月）　目新しい行事として、四月早々、新幹線利用の修学旅行、学級園コンクールが行われた。

生徒会では、正副会長が先輩の残してくれた実績を忘れずに生徒一人一人が自覚して学校生活を送ることが二中を築き上げて行くことになると述べている。新聞委員会は顧問の先生に助けられながら、十一月に待望の「すわだがおか」を発行。県の優良賞を受ける。

クラブでは合唱クラブが誕生している。合唱に関しては「歌のあるクラス」という作文に三年四組のクラス風景が書かれている。――今週の歌が歌われている教室には生徒自作のステレオもあり、先生もレコードを買ってくれた。きっかけは合唱コンクール、クラスが団結した。心が通い合う歌を残り少ない中学校生活を有意義に送るために歌を歌う――。

本号では、『「すわだ」に寄せて』と題して数人の先生方が寄稿されている。その中で、中台教頭は「人間はスポーツのできるうちが一番華である。それに結びつけて　時間を守る　ことを心がけている。スポーツマンシップとは　①ルールをまもる　②常にベストを尽くす　③フェアプレーの精神と考えられるが、これは社会の中でも通ずることである。スポーツにより身体と共に精神をも鍛えてスポーツマンシップを身体で会得してほしい」と希望されている。

第八号（昭和48年3月）　本年度は学制発布百周年の記念行事が各所で行なわれた。本校は創立二十五周年の記念の年である。『すわだ』第八号は創立二十五周年を祝す記念冊子となる。

昭和47年（日本列島改造論で曲がり角）

経済の動き
日本列島改造論が、太平洋ベルト地帯に集中している工業地域を低開発地域に分散させ、土地投機と後の狂乱物価の最大の原因となる。

日本赤軍事件起きる
2月連合赤軍浅間山荘事件が起こる
5月日本人ゲリラによるテルアビブ事件発生

須和田祭　お手前（47年）

生徒会では、委員会制度を工夫して会則を改正し、後期生徒会長の藤井千春君は「須和田が丘改造」計画を打ち出し、次回の引き継ぎに際しては「一生懸命に活動し、これだけの事を残した」と言えるようにしたいと語っている。各委員会の報告では、活動が全て一部の委員の負担で行なわれているので、広く理解と協力を求める内容である。

クラブ活動では、体育関係のクラブは一年間の活動の成果を告げている。文化クラブでは、ギタークラブの創設、茶道クラブの華道クラブからの独立、家庭科クラブから手芸クラブへの名称変更、ブラスバンドクラブの活動停滞などが一年間の活動と反省として報告されている。

第九号（昭和49年3月）　宇津木校長は心の歴史を振り返ってみることは極めて大切である。過去、現在の延長線上に未来があるからだ。すばらしい未来は偶然ではなく、そこにたどり着くまでの、去り行く毎日の充実した歴史がなければならない。この会誌発行を機会に、より良い方向へ、より力強く伸びるよう、しっかりと自分自身をみつめて生活を高めていってほしいと記されている。

生徒会では、新旧の会長、副会長が任期中は良くやったという自負と、会長には個性と行動力、本部役員には協調性、会員には関心と評価が必要であることを強調している。また、須和田祭に本部役員でコーヒーショップを開き予想以上に好評であった。収益は生徒会の赤字を補うための資金にすると書いている。各委員会の報告では、「須和田が丘改造論」によって、保健体育委員会が保健委員会と体育委員会に分かれ、顧問の先生に頼りすぎであった保健の仕事をきちんとやりたいとある。図書委員会も「図書室改造論」を立てれば、二中の砂ぼこりから書架ごと守る管理は困難だが、本の貸出しに委員の数を各クラス二人以上にしたという。それぞれの委員会が地道に活動して成果をあげたこと、特にベルマークで購入した時計や鉛筆削りを見ると、その委員であることの嬉しさや誇りを強く感じるとの手記が印象的である。

航空機事件
◎6月、日航機インドのニューデリー空港で墜落
◎11月、日航機モスクワ空港で墜落

沖縄本土復帰

自然環境保全法公布

☆札幌冬期オリンピック大会開催
☆山陽新幹線（新大阪～岡山）開通
☆大蔵省が紙巻きタバコに注意表示「健康のために吸いすぎに注意しましょう」を指示
☆自動車運転免許「初心者マーク」が義務化

駅　伝

本号から文化クラブを中心としたクラブ活動と、主として体育部を中心とした部活動に分けている。英文学クラブでは、二学期から外人講師を招いて日常英会話の講習を受けたこと、初めはドキドキしたが、笑われても気にせず、次第に講習が楽しくなったと述べている。部活動では、陸上競技が市内大会で総合優勝、市内駅伝で優勝、卓球が市内大会で各部門パーフェクトの優勝、剣道が団体優勝、女子個人準優勝にそれぞれ輝いたことを報じている。

「あとがき」に第一次石油ショックの影響で紙不足、物価高となり、紙面を減らさざるを得なかったとある。

第十号　（昭和50年3月）　昭和四十九年に着任された鈴木昌男校長は、「すわだ発刊に寄せて」と題し、「先人の残された伝統と歴史を継承してきた須和田ケ丘の森を愛でて」と一篇の詩を寄せている。

なお、鈴木校長は五十年四月に次の校訓を掲げた。

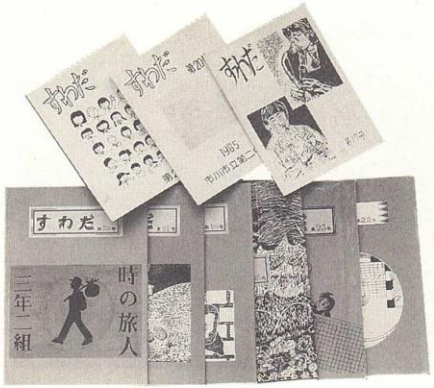
一、若き日に、君は体躯を養え
一、若き日に、君は知能を磨け
一、若き日の、君の希望を太陽につなげ
一、若き日に、君は為すことによって学べ

生徒会は、各委員会の報告では保健委員会が「保健だより」を各学期ごとに発行、発表会では「須和田が丘改造論」後の保健活動の歩みを述べ、図書委員会は六千冊余の本の台帳の整理と懸案の図書室の移動という大仕事をなし遂げ、体育委員会は校舎建設工事のため業間体操が室内に移り、徹底されなくなった、など一年間の努力と苦労、成果と反省が記されている。

クラブ活動では、無線クラブ、化学クラブ創設。しかし、クラブ活動は時間が四十五分間では成果

昭和48年（第一次石油ショック）

第4次中東戦争の勃発
◎OAPECは、石油減産措置を決定、石油戦略を発動
◎メジャー、サウジが原油供給量10％削減を通告、第一次石油ショック
◎OAPECは月25％の減産を決定



があがらないと書かれている。

その後の『すわだ』の主な変遷をたどってみると、創刊号から続いた「須和田が丘の風景」の表紙は十六号で終り、十七号からは毎号変わっている。二十二号からは大きく変容し、サイズはB5判と大きくなり、表紙もカラーになっている。二十号あたりから全校生徒の一人ひとりがイラスト、落款、寄せ書きなど何らかのコメントを載せ、学校行事についても体育祭、須和田祭、合唱コンクール、弁論大会など詳細な記録や感想など、生徒のより身近かな生徒会誌になっている。

このようにして『すわだ』は生徒会・文化委員会の協力によって三十年以上引き継がれ、現在も毎年三月に刊行されており、平成八年には三十一号に達した。

修学旅行（万国博覧会）

人類の文化と産業の成果を競う万国博覧会は世界に国力を示す絶好の機会である。日本では戦前、昭和十五年に開催される予定だったが、第二次世界大戦の国際情勢の中で中止となった。戦後、高度成長を達成し、国力も備わり、日本が一番いきいきとしていた時代、昭和四十五（一九七〇）年に開催されることになった。

EXPO'70は〝進歩と調和〟をテーマに、三月十五日から九月十三日まで約半年間、大阪吹田市千里丘陵で開催された。三百三十万平方メートルの敷地に世界各国や国内の産業からの参加によるパビリオンの数は百十五館に及び、入場者六千六百二十二万人という空前の盛り上がりを見せた。戦後の日本にとって最大のイベントの一つであった。

二中でも、この年の三年生（二十二期）の修学旅行は九月に設定され（九日～十二日）恒例の京都、奈良にEXPO見学（大阪）が加わった。卒業アルバムには〝太陽の塔〟や各パビリオンを歩き回る

◎湾岸6カ国石油価格を2倍に値上げ。石油の全エネルギー供給量に占める依存度は、73％の高さであり、石油は全部輸入に頼っていて、その81％までが中東産油国であった、わが国の経済を直撃した。
石油ショックは、国民の生活に多大な影響を及ぼし、トイレットペーパーや紙おむつなどの紙商品が姿を消し、買いだめ騒ぎが起きた。

☆日航機がアムステルダム上空でハイジャックされ、乗客解放後機体が爆破された。

江崎玲於奈ノーベル物理学賞を受賞

生徒たちの姿が残されている。しかし、残念ながら感想文などは見当たらない。

印象的だったのは、当時の世界の二大国、米・ソが宇宙を中心にその国力を誇示したことで、その後のソ連邦の崩壊や、ロシアの現状から考えると隔世の感がある。

『すわだ』六号には次のような当時のソ連の隆盛を物語る一文がある。

ソ連館を見学して　　二年六組　生方麻里

昨年大阪で開催された万国博でいちばん注目を浴びたのは何といっても、ソ連館だと思います。

その巨大な建物に全ての人々は、こころをひかれたことと思います。私もその一人です。期待に胸ふくらませながら長時間並んで待望のソ連館に入りました。入館してまず目についたのはスクリーン一杯にひるがえるソ連の国旗でした。

一階は、教育をテーマとした展示だったと思います。「学べ、学べ、そしてさらに学べ」というレーニンの呼びかけに従ってソ連は教育の発展に大変力を入れています。より多くの人が学べるようにと全ての教育が無料で受けられます。私はさすがに世界の先進国だけあるなあと思いました。ソ連ほど、教育に多額の資金を出す国は他にないと思います。

二階へ行くと何十メートルという高さの針葉樹がたっています。ここは産業をテーマとした展示場でした。その大木とは対照的に小さな木細工の模型もありました。工業都市を描いた物らしく鉄鋼所には真っ赤に燃える溶鉱炉までありました。その精密さは驚くべき物でした。

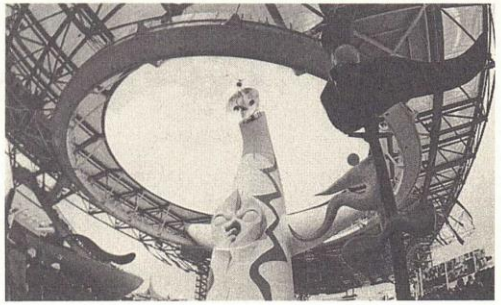
次に宇宙飛行の祖国とまで言われるソ連、宇宙船を見なくてはと思いそこを見学しました。はじめて人間は無限の宇宙空間を飛行することが出来ると証明したソ連。それは大変素晴らしいことだと思います。そして初めて宇宙へ飛びたった宇宙船を観ることの出来た私も、大変幸せ者だとひとりで満足感に浸っていました。これからの人類の進歩のために宇宙へのナゾに突撃するソ連。そんなソ連の姿に力強く期待できる何かを感じました。

まだまだソ連の今まで知らなかった顔を知ることが出来ましたが二、三だけ書いてみました。

待望のソ連館を見終わった時はもう外は真っ暗でした。でも長時間、ソ連館を見学することが出来たので悔いのない一日でした。

夜の万博会場はとても綺麗でした。各国で自慢の照明が夜空に輝き、私はやはりここへ来てよかったと思いました。今はなきソ連館でも、私の心の中には一生あの巨大な姿で聳えていることと思います。

（『すわだ』六号　昭和46年3月）



万国博

昭和49年（狂乱物価と不況で、戦後初のマイナス成長）

経済の動き
政府が石油緊急対策をとったものの、石油価格の上昇と企業の便乗値上げによる、物価の値上がりは止まらず、政府は公共事業を圧縮し、公共料金を抑制する低成長予算を組む。
消費者物価指数は対前年比24・5％の上昇。経済成長率は実質で0・5％のマイナスを記録し、戦後初めてのマイナス成長となった。

マスコミの中の子供たち

マスメディアの発達で家庭生活や子供の生活の中にテレビ、マンガ、ラジオなどが入り込んできた。PTAでは昭和四十五年度の広報キャンペーン活動として、情報化時代の子供や親のあり方について取り上げた。七月の「PTA会報」38号「テレビとわたし」に始まり、39号「マンガと中学生」、40号「情報化時代の子ども」、41号「テレビ、マンガ、ラジオ―その働きと対策は」と四回にわたって連載した。

そしてただ単に傍観者として批判するのではなく、一緒に読んだり、見たり、対話の手段としたり、また、放任せずに子供の生活サイクルをつかむ必要があるとしている。

最終回の「テレビ、マンガ、ラジオ―その働きと対策は」は次のように締め括っている。

テレビ・マンガ・ラジオ―その働きと対策

テレビ　「パーソナルテレビ時代」と言われてから、すでに数年、カラーテレビ一人に一台という家庭はますます増えそうである。それにつれて〝子どもとテレビ〟の結びつきは一層強くなる。一方、親たちにとっては、「読書を奪った」「遊びを奪った」〝余計もの〟というテレビへの見方はまだ拭い去れない。

これに対しては、「家族集団とテレビの位置づけを明確にすることである」と言える。同じテレビに家族全てが向かい合うことで、いろいろな対話が生まれ、一緒に興奮したり、笑い合ったりできる。そこに共通の通い合いがあると考えられる。ここで、注意すべきは大人の「教育しよう」という意識である。

共通の通い合いは、大人と子どもが対等の立場で見ているからこそ生まれる。むしろ立場を逆転させ、子どもに聞く態度が望ましいと考えられる。要は親が上手な聞き役になることがテレビ視聴の今日的問題を巡るポイントであろう。

マンガ　子どもにマンガを読むなと言っても無理である。人気マンガには、何らかの意味で現在の社会に対する抗議という内容のものが多く、それによって子どもは現代の締め付けからくるストレス解消を図っている。つまり、子ども独自の世界で、大人の立ち入れない世界であると断定する人もいる。これに対する対策は、なかなか見つからない。親たちが経験した子ども時代の単純、軽妙な方法で描かれ、無邪気な滑稽

国民は「節約と省エネルギー」にはしり、大企業は「減量経営」の道を歩み始め、これに呼応するごとく「日本消費者連盟」が結成され、「消費者保護」の運動も開始された。

消費の動き

「使い捨ては美徳」とか、「消費は美徳」といった風潮は消え、「節約は美徳」という古い言葉が最登場。

佐藤栄作元首相がノーベル平和賞受賞

☆堀江謙一の「マーメイド3世号」275日の世界記録で単独無寄港世界一に成功

☆伊豆半島大地震で大被害

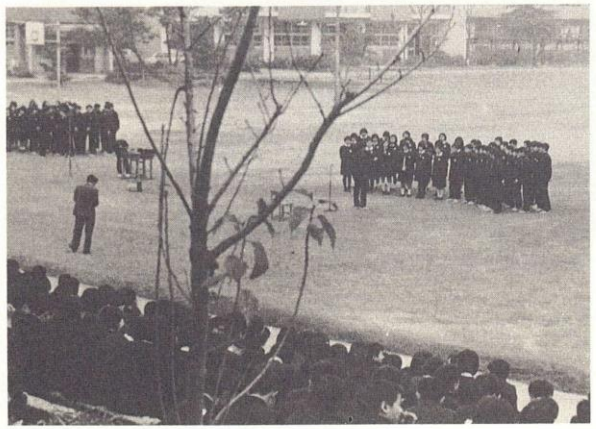
☆高校進学率90・8％

を主とするマンガとは大分かけ離れたものと言わざるをえない。しかし、これらのマンガを手分けして読み、見過せぬ点をチェックする必要がある。

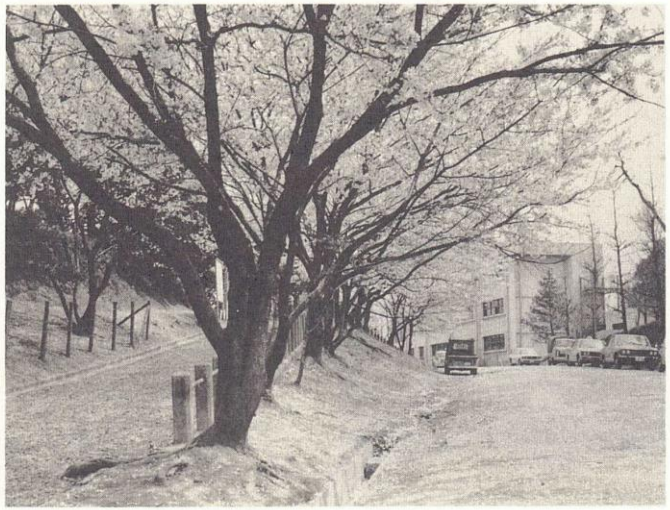
ラジオ　最近の新しいマスメディアとして「深夜放送」が中学生の間で人気があるという。番組の中で、行動的人生相談をしたり、ニュースの奥にある問題まで突き詰めながら番組編成者に新しい感覚を訴え続けているという。その殆どが「ナガラ族」で、深夜にラジオから個人的な相談や勇気付けを個人的に呼びかけられ、共感を呼ぶのであろうか。子どもたちの生活実体が中学生ともなると親の届かない位置にあるような感覚から、これまでは殆どこの面については放任されていたが、批判するだけではなく、このような風潮に対する一つの策としては、一人ひとりの親がどれほど子どもの生活サイクル、一日のスケジュールの把握がなされているかを考えてみる必要があると思う。

（「PTA会報」41号　昭和46年3月10日）

女子もまじえての練習です



合唱コンクール



昭和40年代の校門坂

下校風景（昭和42年）